

令和4年度

「廃寺は語る！よみがえる鹿児島島の仏教文化」発掘調査事業

照信院跡

現場公開資料



照信院絵図(『三国名勝図会』国立国会図書館デジタルコレクションから転載 改変)

令和4年6月24日(金)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

「廃寺は語る！よみがえる鹿児島島の仏教文化」事業について

江戸時代には、幕府の仏教保護政策の影響もあって、仏像を神体とする神社があるなど神仏混淆の傾向がありました。幕末から明治時代はじめ、王政復古(天皇中心の政治へ戻すこと)によって祭政一致をめざす新政府は、明治元(1868)年神仏分離令を出し、神社からの仏教的色彩の払拭に努めました。多くの地方では神仏分離のみで廃仏毀釈には至りませんでした。鹿児島藩は神仏分離に止まらず、寺院・仏像の破壊、経典・仏具の焼却を求めると徹底した廃仏を断行し、すべての寺院を破壊したため、鹿児島島の仏教文化は大きなダメージを受けました。

本事業では、近代化の流れの一方で、失われていった寺院跡の現存状況の把握などの考古学的な調査を行い、その存在や歴史的な価値をよみがえらせることを目的としています。

照信院について

照信院は、『大崎名勝誌』に、和銅元年(708年)に修験道開祖 役小角の弟子である義覚がこの地にやってきて、飯隈山を開山、新熊野三社権現を勧請し、阿弥陀如来・薬師如来・千手観音の三尊を安置したことが由来と記されています。また、天平15年(743年)に聖武天皇の勅願所の宣旨を受け、神領の地一千石を支給されたとも伝えられています。中世以降は本山派修験の京都天台宗聖護院の末寺として、聖護院や近衛家などの中央勢力や、島津各代の藩主と深く関わり南九州最大の修験道場として君臨しました。しかし、明治元年の廃仏毀釈で、飯隈山の寺院は破壊し尽くされ、長く続いた聖域は完全に失われてしまいました。大崎町指定文化財になっている仁王像や古墓群は、その後地域住民や大崎町によって、掘り起こされ、復元されたものです。仁王像は、破壊されなければ国宝級であったともいわれています。

(『おおさきの歴史を旅してみませんか』より引用・一部改変)

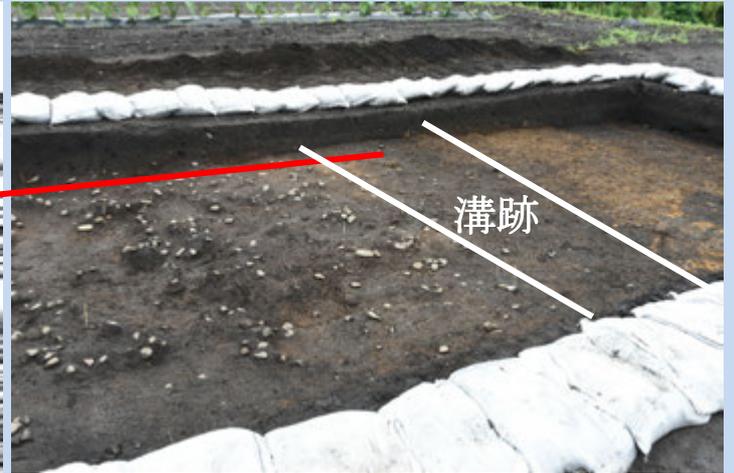


仁王像



現在の熊野神社

照信院跡の発掘調査の成果について



かまど状遺構？



小石の詰まったピット



照信院跡から出土
(華瓶:けびょう)



参考
聖観音懸仏 45.5cm 像高21.0cm 重要文化財
東京国立博物館デジタルコンテンツから引用

銅鏡や鏡に擬した鏡板に、線刻や彩色で仏像・神像を表したものを鏡像といい、鏡板に立体的な仏像・神像を取り付けたものを懸仏かけほとけといいます。これらは「御正体」と呼ばれ、懸け吊して礼拝の対象とされました。鏡像の発生と展開には、密教における観想や、神仏習合による本地垂迹思想ほんちすいじやくなどが関わっています。密教的主題の鏡像に始まり、平安時代を通じて像が立体化していき、鎌倉時代以降は懸仏が主流となっていきます。

光台寺跡(指宿市)の紹介(令和3年度発掘調査)

光台寺は、徳川第13代将軍家定に嫁いた天璋院篤姫てんしょういんあつひめが生まれた今和泉島津家いまいづみしづえの菩提寺ぼだいじ(時宗)です。天保14(1843)年に薩摩藩が編纂した『三国名勝図会』さんごくめいしょうずえによれば、正式名称を道熙山壽祥院光台寺どうきさんじゅうしやういんといい、延享2(1745)年、薩摩藩第4代藩主島津吉貴よしたかが建立を命じ、宝暦7(1757)年、第5代藩主継豊つぐとよの代に現指宿市西方宮ヶ浜あんたいさんにあった安泰山源忠寺げんちゆうじの末寺西光寺さいこうじを曹洞宗から時宗に改めて移設し、水引(現薩摩川内市)にあった光台寺の寺号をとって創建したとされています。

島津吉貴の死後は、その位牌いはいが置かれ、今和泉郷の菩提所となりました。開山僧は、鹿兒島の浄光明寺21世の廓心上人じやうこうみやうじ、本尊は、『三国名勝図会』では、阿弥陀如来あみだにょらいとあり、天保13年(1842)にまとめられた『藤澤山衆領軒』とうたくさんしゅうりやうけんには、釈迦如来しゃかにょらい、文殊菩薩もんじゅぼさつ、普賢菩薩ふげんぼさつの三体であるとされています。光台寺も明治2(1869)年の廃仏毀釈によって廃寺となりました。



光台寺跡石垣残存状況



光台寺跡瓦出土状況

光台寺跡の発掘調査の成果について

昨年度の発掘調査では、光台寺跡推定地から近世の瓦や中世・近世の陶磁器が数多く出土しています。



光台寺跡出土瓦



光台寺跡出土陶磁器